

新連載

紅河デルタ——地理学ベースの農村開発

連載

連載にあたって

いまベトナムがおもしろい。1986年に始まった経済開放政策ドイモイから15年。ホーチミンというカリスマ的指導者をいだいた社会主義国は、市場経済に参入し積極的に外資も導入しながら活力を取り戻した。第2のバンコクをめざすかのようなホーチミン市(旧サイゴン)の喧噪と肥大化に比べると、首都ハノイはどことなしか控えめである。しかしハノイはベトナム人にとって時代を超えた永劫の(みやこ)であり、その周囲の紅河デルタはベトナム農民が営々と築き上げてきた穀倉地帯である。紅河デルタ農村に外国人が調査に入れるようになってまだ数年しかない。ハノイでは今や見ることの少なくなったカーキ色のサファリ帽も、まだ農村部では健在だ。しかしこの紅河デルタの農村も、いま急激な変化の渦中にある。

私は大学間学術交流協定が縁で、1997年からハノイ大学地理学教室とかかわることになった。この連載は昨年から旭硝子財団から研究助成を受けて、地理学をベースとした農村開発を指向するささやかな共同研究の一里塚である。ベトナム人研究者や地方行政の末端をになう指導者にも執筆いただき、変わりゆく紅河デルタ農村の姿と人びとの考え方や行動をいろいろな形の文章で紹介していきたい。5回の連載を予定しているが、まず第1回目はベトナムを代表する地理学者に、紅河デルタの地域開発と農村変化のアウトラインを綴ってもらった。

野間 晴雄(奈良女子大学)